

女性語辭典

性語辭典

真下三郎編・東京堂出版

編者略歴

明治四〇年京都市生まれ。昭和八年東京大学文学部国文学科卒業。文部省国語調査官補を経て、広島高等師範学校教授、広島大学教授。昭和四五年定年退官。現在、広島大学名誉教授、山陽女子短期大学教授、表現学会顧問・理事、日本歌謡学会評議員。中国文化賞(昭和四二年)、頼山陽記念会文化賞(昭和六三年)受賞。主な著書『近世の国語教育』(文部省)『婦人語の研究』(東京堂出版)『遊里語の研究』(東京堂出版・文部省刊行助成)『書簡用語の研究』(漢水社)『国語表現法概説』(修文館)『広島県の民謡』(第一法規)『広島県の神楽』(第一法規)『広島県の盆踊』(漢水社)『広島県の獅子舞』(漢水社)。

女性語辞典

定価三二〇〇円

一九六七年二月二〇日 初版発行
一九八九年一〇月二〇日 三版発行

編者 真下三郎

発行者 澄田讓

印刷所 理想社印刷所

製本所 渡辺製本株式会社

発行所 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町三ノ七 (〒100)
電話 東京 三三局三七二 振替 東京 三三三

序にかえて

約三十万といわれる国語の語句のなかには、その成りたちから考えると、外来語は多数あるとしても、なお、わが国で作られ、用いられてきたものは、決して少なくありません。こういう語句のうち、女性が、なんらかの点でかわりを持っていたものを、便宜「女性語」と名づけますと、女性語の数は案外多く、五千語をくだらないのではないのでしょうか。しかもそれらは、製作とか愛用とか、いろいろな、緊密な機縁によって女性と関係づけられていますから、女性の立場を反映するものと見ることができ、女性の考え方や感じ方すらも、そのなかに窺められていると思われまふ。したがって昔からの女性語を調べることは、日本の女性そのものの研究にもつながることとなりましよう。

こういう考えから、私は女性語に興味を引かれて、今までに二三の研究書を出しました。昭和二十三年の「婦人語の研究」昭和四十一年の「遊里語の研究」などです。しかしこれらは女性語の成りたちや文末の言い方などに関するもので、語句そのものの研究とは申せません。語句そのものの研究は目下手がけていますが、女性語は大きく女房詞・尼門跡語・遊女語・大和言葉・忌詞および町家女性語の六系列に分けられることに気づき、ぼつぼつ集めておりました。

ところで私が女性語と取り組んでいますことが伝えられて、「女性語は真下」などという穏やかならざる噂が立ちはじめ、突然、東京堂出版の石井良介氏から「女性語辞典を作れ」という命令です。東京堂出版といえば辞典、と答えるほど、各種のすぐれた辞典を出しておられるなかに、その末席に加えていただくのはたいへん光栄ですが、とても私にはその力がございません。その上最近「女房詞」や「尼門跡語」にはりっぱな研究が世に出ています。それで最初は躊躇をしたのですが、国語の研究に常に真剣な態度を示されている石井氏の熱情に打たれたのと、一応各系列の女性語をまとめてみて、将来いろいろな角度から研究される方々の出現を待つのも、また意義のあることではないかと思ったのと、二つの点から、負うけなくも、そのおすめを引受ける決心をいたしました。そして二年ほど独りでこつこつと、女性語のなから重なるものを約四千語抜き出して、簡単な注をつけたのが本書です。もとより研究途上の事でもありますし、たいせつな語で選に漏れたものもあり、注の簡略に過ぎるものや誤解しているものも少なくないことでしょう。その点は諸方のご叱正をいただきたいと思います。なお巻末に「女性語について」の簡単な解説をつけました。なにかのご参考になりますれば幸いです。

いよいよ本書が出版されることになってみると、終始ご声援をくださった東京堂出版の石井良介氏と古河功氏のご協力が今更のようになりがたく思われます。謹んで御礼申しあげます。

昭和四十二年一月十五日

真 下 三 郎

凡 例

- 一 この辞典は女性語約四千を収録したものである。
- 二 語の配列は語頭を五十音順に並べた。ただし「ゐ」「ゑ」「を」はそれぞれ「い」「え」「お」に含めた。また「ん」の部も作つてある。なお語の二音節目以下も五十音順にしたが、助詞の「は」「へ」「を」はそのまゝにした。
- 三 見出し字は「現代かなづかい」によって示し、次に「歴史的かなづかい」を付記し、さらに漢字で表記できるものには漢字を当てた。

あいかた あひかた 相方。相魁。
きやら きやら 伽羅。
なんとでもおいしいなんし なんとでもおいひなんし
何とでもお言ひなんし。
- 四 見出し字の次に、その語の品詞を記号で示した。

〔名〕は名詞 〔代〕は代名詞 〔動〕は動詞 〔形〕は
形容詞 〔形動〕は形容動詞 〔副〕は副詞 〔感〕は
- 感動詞 〔助〕は助詞 〔助動〕は助動詞 〔接辞〕は
接頭〔尾〕辞である。なお句は〔句〕とした。
- 五 品詞の次に、その語句の出自を記号で示した。

《遊里》は遊里語 《女房》は女房詞 《尼》は尼門跡
語 《忌詞》は女性忌詞 《大和》は大和言葉 《女
性》は一般女性語である。
- 六 解説は現代文体とし、「当用漢字」現代かなづかい
を用い、なるべく簡潔に書くことにつとめた。
- 七 同じ表記でも意味の異なる語句は、それぞれ別項と
した。たとえば「かか」は四項、「かもじ」は四項に
なっている。
- 八 直接引用した用例の出典は、できるだけ解説の中に
書き示した。その出典名は巻末の「女性語について」
の中に掲げてある。
- 九 巻末の「女性語について」はぜひとも参照していた
だきたい。

あ

ああえず 「句」《遊里》 ああえず。嗚呼嘔吐。「ああ」は咏嘆の語、「ゑづ」は

「ゑづい」(飲食したものを吐きたいような気持)の語幹。「ああ気持が悪いわ」というような時に、遊女がいうことば。「ああ不得」と書いた本もあるが誤りである。江戸時代の初期に作られ、長く用いられた。特に天和ころは大阪新町扇屋で用いられたことが『好色二代男』に出ている。

ああきようこつ 「句」《遊里》 ああきようこつ。嗚呼軽忽。「ああ」は咏嘆のことば。「軽忽」は軽蔑すること。「ああ、ばからしい」の意。江戸時代初期から用いられた遊里語。

ああしんき 「句」《遊里》 ああしんき。嗚呼辛気。「ああじれったい」の意。

ああえ——あいそ

天和ごろ大阪新町の新屋で用いていたことば。『好色二代男』に出ている。

ああらつちもねえ 「句」《遊里》 ああらつちもねえ。嗚呼埒も無え。「ああ理屈に合わぬ、無茶苦茶な事だねえ」という意。江戸時代中ごろ以後、江戸深川で用いられたことば。明和七年の『辰巳之園』に出ている。

あい 「名」《女房》 あひ。間。間食の異名。食事と食事との間に食べる物一般の女房詞。のち宮中では丁寧に「おあひの物」ともいわれた。室町時代の『大上臈御名之事』に出ている語。

あいをきる 「句」《遊里》 あひをきる。相を切る。遊女が馴染を重ねた客と縁を切ること。江戸時代初期から存在した句。明暦以前の『秘伝書』にも「いづれとも、あひをきり申し候」などとある。

あいかた 「名」《遊里》 あひかた。相方。相魁。客の相手となった遊女のこと。『吉原十二時』に「あひ方はまだ身じまひと客も又腹をつくれる八百善

のめし」の狂歌がある。

あいさつ 「名」《遊里》 あいさつ。挨拶。一般語であるが、江戸時代遊女の評判記によく用いられて、遊女の客に對することばの応対を意味する語となった。明暦元年の『難波物語』に「あいさつは悉皆公事の作法なり」とある。なお同書に「あいさつものなり」とあるのは、この「あいさつ」がきちんとできる者という意である。寛文七年の『讃嘲記』に「をもしろきもの、花夕(遊女の名)のあいさつ」とある。

あいしらろ 「動」《遊里》 あいしらふ。処理する。応対する。一般語であるが、江戸時代初期遊里でも客に應對する遊女について用いられた。明暦二年の『増り草』に「男をあいしらふ事、かいもくがてんゆかず」とある。

あいそらしい 「形」《遊里》 あいさうらしい。愛想らしい。やさしく愛嬌があること。一般語であるが、遊里には江戸時代初期からある語。明暦二年の『増り草』に「詞小聲に愛想らしく、

かたぎしとやかにして」とある。

あいどこ 「名」《遊里》 あひどこ。相床。同じ部屋に二つ床を並べてとること。江戸時代初期からの遊里語。『吉原十二時』に「定めなき客も時雨に相床やてらすは年増ふるは新造」とある。

あいぼれ 「名・形動」《遊里》 あひぼれ。相惚。遊女と客とお互いに好き合っていること。一般語であるが、男女の交渉の多い遊里では特に多く用いられたことば。寛文七年の『吉原すずめ』に

「さしちがへて死ぬる事、ふかくしみたるうへ、あひぼれにてする事なれども」とある。また『吉原十二時』に「騒ぎあふ座敷はひけて初会には胸をとり合ふ相惚の床」という狂歌もある。

あいましたし 「句」《遊里》 あひましたし。会ひましたし。お会いしたいの意。一般語であるが、特に遊里では、遊女が客に痴話の手紙を出す時に、なるべく使ったがよいとされたことば。

寛文元年の『吉原用文章』に出ている。

あう 「動」《遊里》 あふ。逢ふ。遊里で

は遊女が客と関係をもつことをいう。明暦二年の『都物語』に「外のちいんにもあはせじ」とあり、寛文七年の『讃嘆記』に「ながきもの、はじめてあふ夜のなかだち」とある。のちも長く用いられた。

あおい 「名」《女房》 あふひ。葵。蕎麦（そば）の異名。室町時代から用いられた。

あおのうれん 「名」《遊里》 あをのうれん。青暖簾。青い暖簾のかかった局見世。江戸時代の初期、最下級の局のいる家は家紋を染めた青暖簾をかけていた。延宝九年の『吉原下職原』に「かしばたのあをのうれん」とある。

あおのもじ 「名」《女房》 あをのもじ。青のもじ。青海苔の異名。室町時代に作られた語。文明十四年四月十日の『お湯殿の上の日記』に「あんぜんじ殿よりあをのもじまいる」とある。

あおまめどき 「名」《遊里》 あをまめどき。青豆時。早朝のこと。江戸時代の初期、京都の町を夜明けごろに、青豆

を売る者が売り歩いてた。それから出た語。ただし遊里で使う時は、朝早く来る客を悪くいう意味があった。江戸時代初期の遊里語。

あおももの 「名」《女房》 あをもの。青物。一般にいう「菜」の異名。色彩に「物」をつけた女房詞は、このほかに「しろ物」（塩）「くろ物」（いりこ）などがある。室町時代の『大上臈御名之事』に出ているから、古い語であるが、以後も広く行なわれて、一般語となり、現代に及んでいる。

あおやぎ 「名」《大和》 あをやぎ。青柳。麦の異名。麦の葉の青々と茂っているさまが、青柳に似ていることから出た語。なお麦には他に「とこしへぐさ」「としこえぐさ」という異名もあった。

あおやぎ 「名」《女房》 あをやぎ。青柳。「青い麦」の異名。江戸時代にできたが、特殊なことばであるため、あまり普及しなかった。

あおやぎのいと 「句」《大和》 あをやぎ

のいと。青柳の糸。江戸時代の『増補大和言葉』に「みだれやすき事」とある。『新古今集』などに用例が多い。

あか〔名〕《女房》 あか。赤。小豆の異名。小豆は色が赤いため付けられた。ただ「あか」では短いため、繰返して

「あかあか」ともいった。室町時代の『大上臈御名之事』に出ているが、以後長く広く用いられた。天正九年五月十五日の『お湯殿の上の日記』に「上らふよりきんとんにあかの入たるまいる」とある。

あかあか〔名〕《女房》 あかあか。小豆の異名。小豆は色赤いため「あか」といったのを、発音上繰返したもの。このような例は「あさあさ」「みそみそ」「ほりほり」など他にも多い。しかし小豆の場合は「あか」が広く行なわれて「あかあか」はあまり使われずに終った。室町時代の『大上臈御名之事』に出ている語。

あかおまな〔名〕《女房》 あかおまな。赤おまな。鮭の異名。「赤いお魚」の

意味。室町時代の『大上臈御名之事』に出ている。「あかまな」と呼ばれたことがあったが、長く使われた。文明九年八月二十五日の『お湯殿の上の日記』に「むろまちどのよりあか御まなまいる」とある。

あかおまな〔名〕《女房》 あかおまな。鱒の異名。「赤いお魚」の意で、元来鮭の異名として室町時代に作られたが、のち江戸時代に鱒にも用いられた。あかか〔名〕《女房》 あかか。小豆の異名。「あかあか」といったのが、普及するうちに「あかか」に転じたものである。江戸時代も末期に近く出現した。

あかきおろり〔名〕《女房》 あかきおろり。赤き御瓜。西瓜の異名。延徳四年六月十六日の『お湯殿の上の日記』に「大すもじよりあかき御うりまいる」とある。

あかきおこわくご〔名〕《女房》 あかきおこはくご。赤飯の異名。室町時代末期一時用いられた。天正七年八月六日の『お湯殿の上の日記』に「上らふよ

りあかき御こわく御一御かはらけまいる」とある。

あかこわいい〔名〕《女房》 あかこはい。赤飯の異名。江戸時代一時用いられた。最も普及したのは「こはくご」「おこは」であった。

あかぞろ〔名〕《尼》 あかぞろ。煮た小豆に砂糖をかけて食べるものの称。

あかねさす〔句〕《大和》 あかねさす。茜さす。江戸時代の『増補大和言葉』に「日の出づる事なり」とある。本義は茜の根で染めると美しい色に染まる

ところから「日」「昼」「照る」などにかかる語。『万葉集』に用例がある。

あかねさす〔名〕《女房》 あかねさす。

「日の出」の女房詞。茜（あかね）はつる草の一種で根から赤黄色の染料をとった。それから出て「日」「昼」「紫」

「照る」「月」「君が心」などの枕ことばとなつて、『万葉集』にもその用例が多い。江戸時代初期女房詞を選定する際、「日の出」の女房詞として採られたが、あまり普及しなかった。

あかねのめし「名」《女房》 あかねのめし。茜の飯。小豆ごはんのこと。色が赤いのでいう。江戸時代になって作られたが、小豆ご飯には他に「あかのめし」「あかのおばん」などいろいろの語があったため、この語はあまり使われずに終わった。

あかのおばん「名」《尼》 あかのおばん。赤の御飯。小豆ごはん。「あか」は小豆の女房詞、「おばん」は尼門跡のみで使うごはんのこと。「御前(ごぜん) あかのおばんをあがらっしゃりますか」というように用いる。

あかのかちん「名」《女房》 あかのかちん。煮た小豆をつけた餅の異名。室町時代に作られ、長く宮中および尼門跡で用いられた。慶長三年八月六日の『お湯殿の上の日記』に「どんけみん殿よりあかのかちんいろ／＼まいる」とある。現在尼門跡では「お」をつけて「あかのおかちん」という。

あかのくご「名」《女房》 あかのくご。赤の供御。赤飯のこと。室町時代に作

られた。

あかのしんこう「名」《女房》 あかのしんかう。大根の漬物の一種。江戸時代に作られた。

あかのめし「名」《女房》 あかのめし。

小豆飯の異名。「あか」は小豆の女房詞で、小豆飯は室町時代では「あかのくご」といわれていた。江戸時代になって「くご」が「めし」と変ったため、「あかのめし」となった。

あかば「名」《遊里》 あかば。語源は明らかでないが、太鼓持の異名という。江戸時代の語。

あかまえたれ「名」《遊里》 あかまへだれ。赤前垂。飯盛(めしもり)のこと。江戸時代の飯盛は赤い前垂をつけていたところから出た語。

あからめ「名」《大和》 あからめ。あから目。江戸時代の『増補大和言葉』に「よそ目なり」とある。『宇津保物語』に用例がある。

あがりなまず「名」《遊里》 あがりなまず。あがり鯰。遊女にうまく取り入ら

れて、言うとおりになるお客のこと。

「あがる」という語は、魚が死ぬ場合をいう語である。また鯰は生きていても人々はさほど賞玩しない。まして「あがり鯰」は人々がまずい物として、見向きもしないところから、何の役にも立たない者にたとえていう。遊里では、特に、遊女遊びをしすぎて財産をなくした客をいう。明暦元年の『難波物語』に「しゅじゅ様々のやきであへば、まこととおもひて、とかれをそかれ、あがりなまずとなる事、目のまへなり」とある。

あがる「動」《女房》 あがる。「食ふ」の女房詞。「召しあがる」の上略か。江戸時代以後、広く行なわれて一般語となった。

あがる「動」《女房》 あがる。「贈られる」ことを尊敬するという。宮中や尼門跡で用いられたが、尼門跡では宮様階級以下の場合に用いられて「おかへ殿より御くわしぶくろ二つ上ル」のように用いられた。宮様階級以上の場合には

「まいる」が使われた。また尼門跡から宮中へ「贈る」場合には、この語が用いられて「きん中さまへいつものごとく御くわしあがる」のように用いられた。

めがる 「動」〔尾〕 あがる。魚が死ぬこと。「金魚があがった」などという。

めきかぜ 「名」〔遊里〕 あきかぜ。秋風。客が遊女に飽いてくること。「飽き」を秋にかけ「秋風が吹く」などと使う。寛政六年の『虚実柳巷方言』に出てゐる語。

めきかぜがたつ 「句」〔遊里〕 あきかぜがたつ。秋風が立つ。愛情のさめはじめること。「秋」に「飽き」がかけられている。平安時代からの古いことばであったが、江戸時代に遊里で広く行なわれた。寛文七年の「吉原すずめ」に「ひかれぬしゆびになりて、此方にも秋風たち、むかふにも、すへはとげまじとさぐりて」とある。

めきつしま 「名」〔大和〕 あきつしま。秋津島。江戸時代の『増補大和言葉』

あがる——あくし

に「日本の事なり」とある。正しくは「あきづしま」で『古事記』に用例がある。

あきなしぐさ 「名」〔大和〕 あきなしぐさ。秋無草。特定の草木をいうのでなく、冬に生える草の総名である。天明六年の『譬喩尽』に出てゐる。あきのた 「句」〔大和〕 あきのた。秋の田。江戸時代の『増補大和言葉』に「ほに出る思ひなり」とある。『古今集』に「秋の田のほにこそ人を恋ひざらめ」の歌がある。

あきのはぎ 「句」〔大和〕 あきのはぎ。秋の萩。江戸時代の『増補大和言葉』に「わりなきをいふ」とある。『万葉集』に「白露と秋の萩とはこひ乱れわくことかたきわが心かも」の歌がある。あきまぢぐさ 「名」〔大和〕 あきまぢぐさ。秋待草。草木の名でなく、夏の田をいう。秋熟する稲の生えているさまでできた語。天明六年の『譬喩尽』に出てゐる。

あきれけるよ 「句」〔遊里〕 あきれけるよ。

えるよ。呆れ返るよ。「とても呆れたよ」の意。天明ごろ江戸吉原の角玉屋で使われたことば。天明八年の『傾城觸』に「ことばの内には是を多くいふ」と注しているから、会話の中で感投的に挿むことばであつたのであらう。

あきれんす 「句」〔遊里〕 あきれんす。呆れんす。江戸時代の末期寛政ごろ、江戸吉原にはやったことば。遊女が客に向かつて、自分のおどろきを言った時のことば。「あきれますわ」という表現。

あくおう 「名」〔遊里〕 あくわう。悪王。わがままな相手のこと。延宝ごろの吉原のはやりことば。

あくしやう 「名」〔遊里〕 あくしやう。悪性。元来は人間社会で人の嫌がる事をするという意味で、江戸時代初期ごろは次のような歌まで作られた。「風呂相撲芝居兵法男だてしやみそばきりにばくち大酒」これらみな悪性である。しかし遊里で口にされる悪性は、人をだますことや浮気なことをさして

言った。

あげかべ 「名」《尼》 あげかべ。揚げ壁。揚げ豆腐の異名。特に尼門跡で用いられた。

あげくれない 「名」《大和》 あげくれない。明け紅。江戸時代の『増補大和言葉』に「心なしといふ心なり」とある。本義も出典も明らかでない。

あげずめ 「名」《遊里》 あげずめ。揚詰め。何日も続けて遊女を買いつづけること。寛文七年の『讃嘲記』に「おきなるもの、あげずめにするかい手のかほ」とある。「吉原十二時」の狂歌にも「揚づめをもらへる茶屋が口車のり地にかたる注進もあり」がある。

あげせん 「名」《遊里》 あげせん。揚銭。花代。遊女を揚げて遊ぶ代金。江戸時代の初期には太夫七十六匁。天神三十匁、鹿恋十八匁、局女郎は一匁ないし三匁であった。江戸時代遊里開設以来用いられたことば。寛文七年の『讃嘲記』に「手のよきもの、しまいぶんにしてつかわすあげせん」とある。

あげだい 「名」《遊里》 あげだい。揚代。遊女の花代のこと。あげせん。「吉原十二時」に「手綱をもいかでゆるさん揚代もはらはぬ客のあとに附馬」の狂歌がある。

あけてい 「名」《遊里》 あげてい。挙亭。揚亭。「あげや」に同じ。

あげぼし 「名」《遊里》 あげぼし。揚干し。客が揚げてくれたままやって来ない時、中の町に出て待っている遊女の気持をいう語。「干し」は焦がれつつ待つ気持は、日に乾されているに似ているという意味の語。江戸時代初期ごろ江戸吉原の遊女の間で用いられた語。寛文七年の『讃嘲記』に「きびのよきもの、いきる女郎のあげぼし」とある。明和五年の『麓の色』にも出ている。

あけぼのぐさ 「名」《大和》 あけぼのぐさ。曙草。桜の異名。桜の花の咲いたさまは、曙を見るようであるところから出た。なお桜には他に「もよひぐさ」という異名もあった。

あけぼののつき 「句」《大和》 あけぼののつき。曙の月。寛政板『大和言葉』に「つれなき事」とある。出典は明らかでないが、「ありあけの月」と同義。あげまき 「名」《大和》 あげまき。揚巻。江戸時代の『増補大和言葉』に「かぐらの名」とある。揚巻は昔の子供の髪のかき方。またはその子供。神楽歌に「揚巻を早稲田にやりて云々」の歌曲があるところから出た意味。

あげもうしんしょう 「句」《遊里》 あげもうしんせう。上げ申しんせう。江戸時代末期寛政ごろ、江戸吉原ではやった遊女語。遊女が客に盃をさす時や何かをやる時に使ったことばで、「おあげ申しましよう」という意味の表現。

あげや 「名」《遊里》 あげや。揚屋。遊客が遊女を招いて遊ぶ家。格式の高いのが揚屋で太夫を招くことができ、格式が低いのを茶屋といって天神以下しか呼べなかった。江戸時代初期三都の遊里に何軒か限られて存在した。明暦二年の『都物語』に「さてあげやにい

たるに、ていしゆ出合て」とある。京都大阪は長くその名目を残したが、江戸の吉原のみは近世の中ごろその名称はなくなり、茶屋と呼ぶようになった。元文ころの『洞房語圖異本考異』に「元吉原にて揚屋共、五町中処々に住居しけるが、当時の地へ移りてより、揚屋町といふもの出来て、揚屋ども皆々爰に住居す。然るを享保の末より、次第に止て、今は茶屋ばかりと成りたり」とある。

あげやがみ (名)《遊里》 あげやがみ。揚屋紙。半紙のこと。揚屋で使う紙はすべて半紙で、遊女が揚屋から客に出す手紙などすべてこれに書いたところから、客の間にこの語が作られた。江戸時代初期の遊里語。

あげやさしがみ (名)《遊里》 あげやさしがみ。揚屋差紙。揚屋から抱え宿へ太夫を借りにやる文書。『犬枕』に「長きもの、せつく正月のおさがし」とあるので、紋日のは平日とは文言が違って、長く書かれていたのであろう。

あげやちょう (名)《遊里》 あげやちょう。揚屋町。江戸時代大きな遊里には遊客を待つ設備に、揚屋があった。その揚屋のかたまつてある町をいう。寛文七年の『讃嘲記』に「さびしきもの、あげや町の大つもごり」とあるは、大晦日は年の瀬で、遊ぶ客のいないことをいう。

あげやつき (名)《遊里》 あげやつき。揚屋付き。江戸時代初期の語。揚屋にiriびたりの客をいう。

あげる (名)《遊里》 あげる。揚げる。遊女を買うこと。江戸時代の初期から用いられ、江戸時代を通して長く存在した。語源については諸説があつて、「買い揚げる」の上を略したという説、茶屋へ来た客を二階へ揚げることから出たという説、昔の遊女は水上に住んでいたのを客を船から陸へ揚げることから出たとする説など、一定してない。明和五年の『麗の色』に以上のようにある。

あげる (動)《女房》 あげる。してあげ

るといふ意味の語。「お召替えあげる」「おあおぎあげる(お扇ぎする)のよう」に用いる。宮中や尼門跡で用いられた。あご (名)《大和》 あご。網子。江戸時代の『増補大和言葉』に「綱引く人」とある。『万葉集』に用例がある。

あこぎ (名)《大和》 あこぎ。阿漕。江戸時代の『増補大和言葉』に「度かさなるをいふ」とある。阿漕は伊勢海の海岸の名で、伊勢神宮に供える魚をとるため、人の網を入れるのを禁じていた。『古今六帖』の「逢ふことを阿漕のしまに引く網のたび重ならば人も知りなむ」(三) から出た意。

あさあさ (名)《女房》 あさあさ。浅漬の異名。上半分の「あさ」を残して繰返したもの。同様な女房詞の造語法は、「あかあか」(小豆)「からから」(干鰯)「うきうき」(焼物) などたくさんある。室町時代の『大上臈御名之事』に出ている語で、宮中や尼門跡で長く行なわれた。慶長三年二月十一日の『お湯殿上の日記』に「ごんすけ殿より

あさく、くもじまいる」とある。

あさい〔名〕《大和》 あさい。朝寝。江戸時代の『増補大和言葉』に「あさねなり」とある。『万葉集』に用例がある。あさい〔名〕《女房》 あさい。朝寝のこと。平安時代からの一般語であったが、室町時代にそのまま女房詞にとりあげられた。

あさがえり〔名〕《遊里》 あさがへり。

朝帰り。遊客が夜とまって翌朝早く帰ること。『吉原十二時』に「朝帰り客になごりも口々にぎやうくしてふ吉原雀」の狂歌がある。

あさがお〔名〕《大和》 あさがほ。朝顔。江戸時代の『増補大和言葉』に「夕をまたぬ心なり」とある。朝顔の花は夕方まで保ち得ないで閉じてしまふため出た語。平安時代の歌に多い。

あさがお〔名〕《女房》 あさがほ。朝顔。ふの焼きの異名。ふの焼きは熱にあうと縮むところから、太陽や火にあたるとしぼむ朝顔が類推によって名づけられた。室町時代末期に作られ、江

戸時代を通して行なわれた。

あさがおのつゆのま〔句〕《遊里》 あさがほのつゆのま。朝顔の露の間。短いのことのたとえ。一般語であるが、遊里では、遊女の書く手紙の用語として、客とのはかない縁などについて用いられた。寛文元年の『吉原用文章』にも「御ころのほども、あさがほの露のまほどの、ちぎりにて候」とある。

あさぎうら〔名〕《遊里》 あさぎうら。

浅黄裏。無骨な武士客を悪くいう吉原の遊女語。江戸へ勤番で来る地方の武士は浅黄裏の衣服を着た者が多かったことから出たことば。『吉原十二時』の狂歌にも「傾城の眼や青くなりつらん浅黄裏なる客をとる夜は」とある。

あさごみ〔名〕《遊里》 あさごみ。朝込。江戸時代の初期遊里にあった風習で、夜の明けないうちに遊里の大門外に来て、大門の開くのを待つて遊里へはいること。『嬉遊笑覧』によれば、英一蝶の描いた図に、客は門外におり、門内の腰掛に遊女がたくさん腰掛

けていて、中には門の扉の下の隙間から、盃を客にさしているものもいる。門の番人が今開こうとして鍵を持っているが、まだ夜が明けないと見えて提燈を持っている。これは朝込を描いたものであろうといっている。「朝込み入る」の略とも朝来見ともいう。

あさつき〔名〕《女房》 あさつき。浅葱。野びるの異名。「ありあけ」ともいう。

あさな〔名〕《大和》 あさな。朝な。江戸時代の『増補大和言葉』に「あしたなり」とある。「な」は接尾辞。『古今集』に用例がある。

あさな〔名〕《女房》 あさな。朝な。朝の女房詞。夕方をいう女房詞「夕な」の対。江戸時代初期に作られたがあまり広まらなかった。もともと「朝な夕な」という一般語は平安時代から用いられて、『拾遺集』にも「深山木を朝な夕なにこりつめて寒さをこふるをの炭焼」（雑秋）とある。

あさねがみ〔名〕《大和》 あさねがみ。

朝寝髪。寛政板『大和言葉』に「思ひ乱れかみの事」とある。『万葉集』に用例がある。

あさのおばん 「名」《尼》 あさのおばん。朝の食事。尼門跡寺で使うことば。『こはん』を「おばん」という。

あさばかま 「名」《大和》 あさばかま。麻袴。寛政板『大和言葉』に「はかりごとあさきなり」とある。「あさはか」を呼び出す語。出典は明らかでない。

あさみぐさ 「名」《大和》 あさみぐさ。

朝見草。草木の名でなく、心の用いざまをいう。天明六年の『譬喩尽』に出ている。夕見草・暮見草・折見草も同じ意味。また「松」の異名ともいう。

『蔵玉集』に「夜にあまる月をや山のあさみぐさ」とあるのは松の意。

あさみどり 「名」《大和》 あさみどり。

浅緑。江戸時代の『増補大和言葉』に「柳なり」とある。『古今集』の「浅緑糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か」（春上）から出た。

あさむかい 「名」《遊里》 あさむかひ。

朝迎ひ。朝帰りのこと。遊里では遊女が置屋へ「帰ること」を忌んで「迎ひ」という。寛政六年の「虚実柳巷方言」に出ている語。

あさもどり 「名」《遊里》 あさもどり。

朝戻り。遊女のもとに泊って、早朝帰ること。又その人。江戸時代初期のことば、のち「あさがへり」に変わった。寛文七年の『讃嘲記』に「さびしきもの、しのびてかよふあさもどり」とある。

あさゆうなみだ 「句」《遊里》 あさゆうなみだ。朝夕涙。一日中泣いていること。一般語であるが、特に遊里では、遊女が客に痴話の手紙を出す時に、なるべく使ったがよいとされたことば。

寛文元年の『吉原用文章』に出ている。あざる 「動」《大和》 あざる。寛政板『大和言葉』に「人の中あしくなる事なり」とある。「あざる」は「とり乱しさわぐ」ことであるが、出典は明らかでない。

あじ 「名」《遊里》 あぢ。味。気のきいた事をいう。また遊里では特別な関係

をいう。江戸時代初期の語。明暦元年の『難波物語』に「若だんなどあぢあるよし」とあるのは後者の意。寛文七年の『吉原すずめ』に「これよりやらんと思ふ文に、まづあぢをかきたがるもの也」とあるのは前者の例。

あじろり 「名」《女房》 あぢろり。味瓜。まくわ瓜の異名。江戸時代作られたが、現代は一般語になっている。「きんくわ」ともいった。

あしおぶね 「名」《大和》 あしをぶね。芦小舟。江戸時代の『増補大和言葉』に「思ひつくとの事」とある。出典は明らかでない。

あぢをやる 「句」《遊里》 あぢをやる。味をやる。味なことをする。気のきいた事をする。江戸時代初期の一般語、遊里でも用いられた。明暦二年の『増り草』に「あいさつ者にて、あぢをやりたがる」とある。

あしがき 「名」《大和》 あしがき。葦垣。江戸時代の『増補大和言葉』に「ちかき事」とある。葦垣の結び目は

間が近いのでいう。「古今集」に用例がある。

あしたず 「名」《大和》 あしたづ。芦田鶴。寛政板『大和言葉』に「あし原にすむつるなり」とある。「万葉集」に用例がある。

あじのむらどり 「句」《大和》 あぢのむらどり。あぢの村鳥。寛政板『大和言葉』に「小鳥多く飛ぶ事なり」とある。本義は「鳥のあぢが多く飛ぶこと」で、「万葉集」に用例が多い。

あしびき 「名」《大和》 あしびき。足引き。江戸時代の『増補大和言葉』に「山のまくらことばなり」とある。正しくは「あしひきの」「古事記」に用例がある。

あしびき 「名」《女房》 あしびき。足引。山鳥の女房詞。「あしびきの山鳥の尾のしだれ尾の」という歌から出た。江戸時代初期に作られたが、あまり広まらなかった。

あしや 「名」《遊里》 あしや。吉原のこと。延宝ころの吉原のはやりことば。

あしわけぶね 「名」《大和》 あしわけぶね。芦分舟。江戸時代の『増補大和言葉』に「心くるしきをいふ」とある。茂った葦の間を分けて行く小舟。「万葉集」の「湊入りの葦分け小舟障り多みわが思ふ君に逢はぬこのごろ」から出た。

あすかがわ 「名」《大和》 あすかがわ。飛鳥川。江戸時代の『増補大和言葉』に「かはりやすき事」とある。飛鳥川は大和飛鳥の地を流れる川で、水流の変化がはげしい。「古今集」の「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞ今日は瀬となる」(雑下)による。

あずさゆみ 「名」《大和》 あずさゆみ。梓弓。江戸時代の『増補大和言葉』に「心をひくをいふなり」とある。本義は梓の木で作った白丸木弓で、「引く」にかかる語。「万葉集」以下用例が多い。

あすのゆめ 「句」《遊里》 あすのゆめ。明日の夢。「見ねばわからぬ」ことという。延宝ころ吉原のはやりことば。

あずまじ 「名」《大和》 あづまぢ。東

路。江戸時代の『増補大和言葉』に「東の道なり」とある。京都から東国への道。「万葉集」に用例がある。

あせ 「名」《忌詞》 あせ。阿世。「血」を忌んでいう語。昔伊勢の齋宮では、仏教関係の語や不吉不浄の語などは、そのまま口にするのを避け、別の語を作って使用した。これらを齋宮忌詞という。阿世もその一つ。汗からできた語。「延喜式五」齋宮に、「凡忌詞、外七言、血称阿世」とある。

あそばされる 「動」《尼》 あそばされる。「なさる」の意味で、相手の動作を最高に尊敬する際のことば。

あそばす 「動」《女房》 あそばす。広く「する」ことの尊敬語であるが、江戸時代は手を「拍く」ことにも使われた。貞享三年十二月二日の『お湯殿の上の日記』に「八百宮の御かたかうぜられ、けふより三日御つゝしみ、御手もあそばさず」とある。

ゝあそばす 「助動」《尼》 ゝあそばす。遊ばす。「する」の意味を尊敬してい

う尼門跡の語。一般語でもあるが、尼門跡では平常普通によく使っている。「おいであそばしていただきまして」とか「ひとしとお若返りあそばしました」とか使っている。

あそび〔名〕《遊里》 あそび。遊び。遊女のうちの最低である「けちぎり女」を揚げることを、特に「遊び」という。江戸時代初期の遊里語。のち遊女のことという。

あだ〔形動〕《遊里》 あだ。仇。落ちつかないさま。はかないさま。むだなさま。一般語であるが、遊里では、人の世のはかなさとともに、遊女と客とのはない愛情をいうのに用いられた語。延宝八年の『吉原人たばね』に「さてもあたるうきよの中の、かなはぬものはえんのつな」とある。

あだあだしい〔形〕《遊里》 あだあだしい。仇々しい。浮気っぽい。江戸時代初期の遊里語。明暦二年の『増り草』に「あの利根にて、あまりあだあだしきと思ふほどの心也」とある。

あそび——あたり

あだくらべ〔名〕《大和》 あだくらべ。仇競べ。江戸時代の『増補大和言葉』に「たがひにあだなり」とある。『伊勢物語』に用例がある。

あだちがはら〔名〕《大和》 あだちがはら。安達が原。江戸時代の『増補大和言葉』に「おそろしき事」とある。安達が原は福島県安達郡にある原。拾遺集の「陸奥の安達が原の黒塚に鬼こもれり」といふはまことか（雑下）による。

あだなぐさ〔名〕《大和》 あだなぐさ。仇名草。桜の異名。江戸時代の中ごろに使われた。桜の花の散りやすいことから付いた名。天明六年の『譬喩尽』に出ていいる。『蔵玉集』に「あだなぐさいかなる人の植ゑおきて」とある。

あだびと〔名〕《大和》 あだびと。仇人。江戸時代の『増補大和言葉』に「たしかならぬ人」とある。本義は移り気な人のこと。『古今集』に用例がある。

あだぼれ〔名〕《遊里》 あだぼれ。仇惚れ。真実に惚れるのでなく、何となく惚れたような気持になること。天和元

年『古今若女郎衆序』に「世の中にある人、あだぼれしげきものなれば云々」とある。

あだやき〔名〕《遊里》 あだやき。「やき」は「やきで」で愛情のもつれでわが心を労すること。「あだやき」はにわかになさわがしくやくことをいう。江戸時代初期の語。明暦二年の『増り草』に「男をあだやきしたがる」とあり、寛文七年の『吉原すずめ』にも「心いれすゝどく、おそろしき手をうちて、あだやきにするものは、其きは斗にて、すゑほどあしき事おほし」といつていいる。

あたりいも〔名〕《忌詞》 あたりいも。芋をすったもの。「する」といって縁起が悪いので「あたり」といった。古い商家の主婦や水商売の女性に使われている。

あたりぎ〔名〕《忌詞》 あたりぎ。すりこ木の忌詞。「する」は縁起が悪いので「あたり」に改めたもの。古い商家の主婦や水商売の女性に使われている語。あたりばこ〔名〕《忌詞》 あたりばこ。